1020　　**沖縄県の高校生における危険行動の推移：2002 年～2012 年**

（事務局記入）　○高倉 実（たかくらみのる）（琉球大学医学部）、宮城政也（琉球大学教育学部）

【背景】青少年の危険行動が短期および長期にわたって人々の健康に影響することは周知のことである。危険行動の多くは青少年期に開始され，確立されるために，この時期に行動の実態を把握したり，経年的にその動向を観察したりすることは，効果的な予防政策や健康教育プログラムを立案，実施，評価する上できわめて重要になる。著者らは 2002 年, 2005 年, 2008 年に，複数の危険行動の実態について沖縄県の高校生を対象に全県調査を行い，経年変化を推定したところ，交通安全に関連する行動，喫煙行動，飲酒行動，性交経験，コンドーム使用，および女子の危険なダイエット行動などの多くの危険行動に改善傾向がみられたことを報告した。

【目的】本研究は沖縄県の高校生の危険行動について 2012 年に実施した継続調査の結果を 2002 年，2005 年，2008 年と比較し各行動の経年変化を検討したものである。

【方法】対象集団は沖縄県全域の全日制県立高等学校の生徒である。2002 年は割当抽出した 25 校の生徒 2,852 名，2005 年は同様に割当抽出した 25 校の生徒 2,892 名，2008 年は確率比例抽出による 29 校の生徒 3,248 名，2012 年は同様に確率比例抽出した 30 校の生徒 3,224 名を標本とした。いずれの年度も 2 学期に抽出校の各学年 1 学級に在籍する生徒に無記名質問紙調査を実施した。危険行動は米国 CDC Youth Risk Behavior Survey の質問項目を適用して質問した。質問項目は傷害関連行動 7 項目，喫煙 6 項目，飲酒・薬物使用 6 項目，性行動 5 項目，食行動 6 項目，身体活動 2 項目に分類される。2008 年から身体活動は異なった質問項目を用いたため分析から除き，残り 30 項目について検討した。質問項目の再テスト信頼性は日本の高校生について確認されている。各行動の出現割合の経年変化は，学年，学校種，地域の影響を調整した傾向性検定を男女別に行い検討した。本研究計画については琉球大学疫学研究倫理審査員会の承認を得ている。

【結果】男女とも多くの危険行動に有意な線形傾向がみられ，全体的な経年変化を示唆する知見が得られた。傷害関連行動では，男女とも，シートベルト非着用，ヘルメット非着用，飲酒運転同乗の割合が減少していた。男子では，武器所持およびケンカの割合が増加傾向にあったが，2012 年には減少していた。喫煙行動では，男女とも，生涯喫煙，早期喫煙，現在喫煙，常習喫煙，大量喫煙の割合が減少していた。飲酒行動では，男女とも，生涯飲酒，早期飲酒，現在飲酒，大量飲酒の割合が減少していた。男女とも，違法な薬を提供された者の割合が増加傾向にあったが，2012 年には減少していた。同様にシンナー吸引経験のある男子の割合も増加から減少傾向にあった。性行動では，男女とも性交経験者，性交時のアルコール・薬物使用の割合が減少していた。また，最近の性交時にコンドームを使用した者の割合は増加傾向にあったが 2012 年には減少していた。食行動では，自分の体重について太っていると思う男女の割合が減少していた。女子の不健康なダイエット行動は減少傾向にあった。男女の野菜摂取が増加していたが，男子の果物摂取は増加した後，減少していた。

【結論】2002 年から 2012 年にかけて交通安全に関連する行動，喫煙行動，飲酒行動，性交経験，野菜摂取，女子の危険なダイエット行動に改善傾向がみられた。これらの経年変化の要因として，制度上あるいは外的環境上の変化が大きく影響していると考えられるが，いずれも推測としかなり得ないことが本研究の大きな限界である。

（E-mail: minoru@med.u-ryukyu.ac.jp）